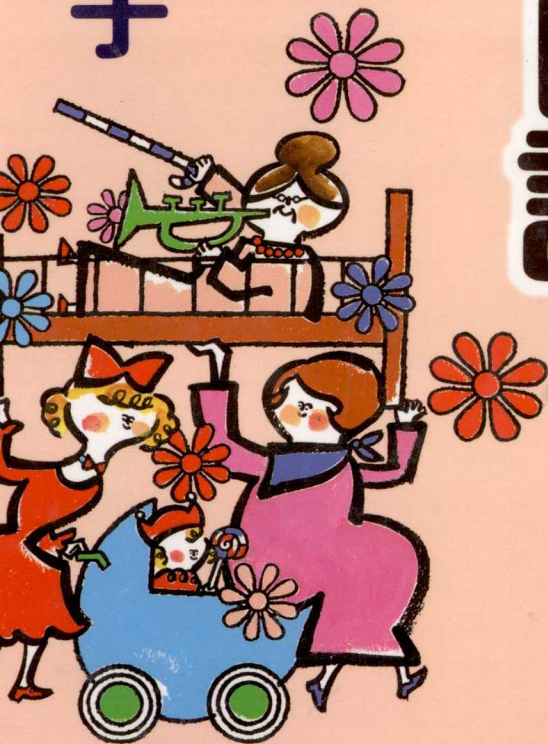


ワガババ 介護日誌

門野晴子

Kadono Haruko



ワガババ 介護日誌

門野晴子
Kadono Haruko



〈著者紹介〉

門野晴子（かどの はるこ）

1937年、東京・浅草生まれ。ノンフィクション作家。82年にわが子の受験戦争を描いた処女作を出版。以後、学校教育問題の著述に携わる。

著書に『愛するもののために』『うちの子に手を出さないで』『スクール・セクシャル・ハラスメント』（学陽書房）、『少年は死んだ』（毎日新聞）、『学歴なんかぶっとばせ』（北斗出版）、『学校休んで一息ついて』（雲母書房）、『性教育Q&A』『教師に異議あり』（朝日文庫）、『老親を棄てられますか』（主婦の友）、『老親の介護で力尽きるまえに』『寝たきり婆あ猛語録』『寝たきり婆あ、たちあがる!!』（講談社）などがある。

ワガババ介護日誌

平成十年一月十六日 第一刷発行
平成十年三月二十日 第八刷発行

著 者 門野晴子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二の十四の一 一〇四一〇〇四五
電話 東京 〇三（三五四三）九六七一（代表）
振替 〇〇一〇一〇九一四四八八六

印刷所 新協印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えます

©1998, Haruko Kadono, Printed in Japan

「はしがき」

家族介護は、セックスと同様、経験したものにしかわからない

介護はセックスと同様、やったものにしかわからない。触れあう肌のコミュニケーション、究極の人間関係の醍醐味^{だいごみ}、引きずり込まれるような疲労感、断ち切れぬくされ縁などをどんなに口を酸っぱくして語っても、経験しない人にはわかってもらえない。家族介護は。

人間には想像力というすばらしい能力がありながら、情報をかき集めてイメージーションを働かせつつ「その日」にそなえても、いざ現実と向きあえば、ワアどうしよう、すごい、こんなはずじゃなかった、お母さんごめんなさいとなるのである。家族介護は。

だから避妊しろと言っただろ、いやいや、だから準備しろと言っただろと言われそうだが、親は元気で長生きがいいとばかり先送りし、いざとなりゃあ施設でもなんでもあるわいとタカをくくっていると、とんでもないことになるのである。

施設は足りないわ、病院は三カ月で追い出されるわ、有料施設はメンタマ飛び出るほど高いわ、行政サービスは利用しにくいわという現状で、この国・自治体が手ぐすね引いて待ち構えるのは、家族という名の女のタダ働き。

経済企画庁の試算によると、家事労働と老人介護で月四十四万円分女は搾取されることになる。ここがセックスとは全然ちがうけどネ。

じゃあ冒頭の「コミュニケーション」はなんだ、とおっしゃるムキには、私は五年余か

かつて要介護の母を受容し、臥床した母のいる光景が私の当たり前前の暮らしとなった。ゴック婆あに対する愛憎が私の心身の一部となり、なお確執のドラマを展開する様は、くされ縁の女と男に似て面白いことこの上なしという次第。

内なる自己完結である。が、外に向かつては、なぜ女が介護を押しつけられるのか、という私の叫びは変わらない。その問いに対してきちんと答えてくれた人も機関もないばかりか、家族復活の声はますます大きくなり、女よ家庭に帰れ、介護にいそしめ、とジワジワと外堀を埋められている。

女をバカにするな、という私の講演を聴いた後で、杉並区の女性が寄ってきて言った。

「でもね、門野さん。私も十年間姑を介護しましたが、いっぱい得るものがあって人間的に成長できましたよ」

だからどうした、バカ。人間的に成長した女がわざわざ私にそんなこと言うかア？

文中に出てくる英会話のアイリッシュの先生が、「バカにはタダのバカと、ホントのバカと、どうしようもないバカがいる」と言ったが、介護ボケした女はどうしようもないバカだ。

美味しいことを言っこって介護地獄に引きずり込む女と、女をおだてて介護地獄に突き落とす男と男社会の狡猾さ。

バカになるなよ、女たちよ。

搾取された労働と女の前近代的役割をしっかりと考えながら、内なるやさしいのちの共生としてコミュニケーションでもオーガズムでも楽しもう。

ところで、最後までカンチガイしていたらしい人は、自立しなさい。性の。

ワガババ介護日誌
—
目次

「はしがき」

家族介護は、セックスと同様、経験したものにしかわからない
1

〔第1章〕

親の介護は頭も心も臨機応変、機転が大事だよ

よく人の命が預かれるね、そんなコチンコチン頭で
10

ひいバババカもバババカもここに極まれり
17

三界に家なしだから、女はどこへでも飛んでいける
25

ちよっと待て、死に支度、その前に寝たきり支度
33

車椅子での外出は、知恵足らずの難行苦行
41

〔第2章〕

泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生だよ

女三代、久々の食卓に漂うは鍋から立ち上がる温もり
50

孫娘の帰国で主婦の血が騒ぎ出すゾンビのよみがえり
59

よみがえりゾンビがハイになる
67

ヘソの緒は切っても切っても生えてくる—— 75

世話になる身はキリキリシャンとしなくっちゃ！—— 83

〔第3章〕

断崖絶壁、後もどりなし。人生、前へ進むしかない

孫は美味しいばかりの人生のデザート—— 92

娘の結婚で、おむつ替えマンができた—— 101

嫌いじゃないが、うっとうしい。これって三角関係？—— 109

ママも私も“人生”自分に賭けたのだ！—— 117

あなたのためよ——善意の押しつけファシズム、もう始まっている—— 125

〔第4章〕

旅は道連れ世は情け、みんなで老いれば怖くない

火曜さん、木曜さん、土曜さん——他人任せにやさしさの花が咲く—— 134

みーんな悩んで年寄りになる—— 142

消費税アップで、引きっぱなしの人生だ—— 150

子育ても介護も必要とされる喜びにどっぶりつかって生きる——159

介護の基本はいかに食べさせ、いかに出させるかに尽きる——167

〔第5章〕

出船あれば入り船あり、この世はすべて順ぐりだ

子どもにいたわられるようになったら、おしまい？——176

一日の介護料四十一円で、レット イット ビー——184

老後というオマケの日々こそ、スリルとサスペンスで——192

お国は、介護を家族に押しつけようとしているの？——200

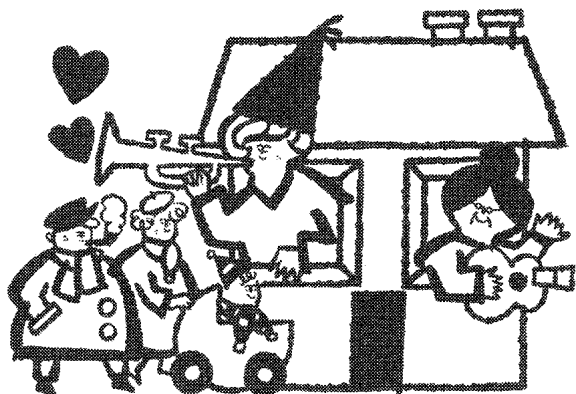
老母の孤独な魂を満たすものは……——208

〔あとがき〕

ゴック婆あの行く道は、いずれ私の通る道——217

〔第1章〕

親の介護は、頭も心も臨機応変、
機転が大事だよ



よく人の命が預^{いのち}かれるね、そんなコチンコチン頭で

あれ、ほんとに見えないんだ

母が目が見えないと言い出したのは、一九九六年の夏からだった。同時に、一日をほとんどベッドの上で過ごす母の、唯一の楽しみといえるわずかな晩酌も、もういらないうと
言うようになる。

東京で三十九度を記録する異常気象のせいだろうと、夏バテでフーフー言っている私は、
たいして気にもとめなかった。夏の間のすべての不快は、涼風が吹くようになれば、ウソ
のように解決するのだから。

昼も夜もトイレの電気がつけっぱなしになっても、トイレの後を流してなくとも、
手洗いの蛇口からタラ〜と水が出続けていても、涼風が吹けば一件落着となるはずだ。
秋のこない夏はない。

なにもかも猛暑のせいだ。健康な人だってこの暑さではおかしいのだから、病人が弱る

のは当たり前だ。そうだ、暑さが目にきたのならうなぎを食べよう。母さん、うな重取っていいでしょう？

私は要介護老人となった母に、老いを認めたくなくて内心ジタバタしていた。いつまでもゴーツク婆あととしてにくまれ口を吐きながら、き然とした病人でいてほしい。あんたの弱々しさなど見たくないのだ。

老いてからだが故障するのはいい。恵まれぬ女の一生のグチもまあしかたがない。しかし中途半端なインテリ婆あが、見栄で抱えている文学書や新聞が読めなくなるみじめさを、あんたも私もどうやって受け入れればいいんだ。

母が骨粗鬆症こつそしょうによる圧迫骨折で寝たきりとなり、長女の拙宅へ転がり込んできてかれこれ五年になる。おむつを当てる身となっても、すまないね、世話をかけるね、なんてしおらしいことは言わない。

親なんだからちゃんと看みろ、と傲然ごうぜんと言い放つアナクロ婆あにヘキエキした私は、介護のおおかたを、介護福祉士の専門学校に行き出した娘に押しつけた。

間もなくしておむつも取れ、寝たり起きたり老人になった母は、「ゴッドマザー」よろしく言いたい放題。熾烈しれつなイニシアチブ闘争を繰り広げる私は、それでも面白いからいいやと、元氣な病人を許容するゆとりがあった。

娘は専門学校を卒業すると、米・パークレーに留学したのが一年半前、二十八歳という「晩学」を掲げてゴック婆あから逃亡した。

孫娘がいなくなつて、母はますます母になる。娘の私に対して保護監督の使命に目覚め、グータラ娘の世話を焼き、主婦業にまで手も口も出す。「上げ膳据え膳」を要求してやまなかつた要介護老人の、なんという変わりようかと私はウホウホし、母の母親役を諸手^{もろて}をあげて承認したのだった。

母が絶望するような病状になつては困るのである。介護に手がかかるのも困るけれど、母の気力やプライドがしおれていくほうがもっとやっかいだ。ひがみいじめて私に八つ当たりするようになるのだろうか。元氣なにくまれ口を叩くのではなく、しめっぽいグチが蛇口からタラッと出続けるように。

母がドドンヒョロヒョロとリズムの定まらぬ足取りで、茶の間に入ってきた。ドドン^のときはよろけて壁につかまる、社交ダンスでいえばクイック、クイックで、ヒョロヒョロはスロー、スローにあたる。

柱でからだを支えて立ったまま、持ってきた新聞を私に突き出して言った。

「今夜のテレビ、なにがあるんだい。新聞の字が全然見えないんだよ」

あれ、ほんとに見えないんだ。

「作り替えたばかりの眼鏡はどうしたの？」

母は不満そうに唇を突き出して言う。

「あれダメだよ。役立たずだ」

クソッ、二万円もしたのに、と思いつながら老眼鏡を捜す私。どこへ置いたっけ？ そうだ、玄関で夕刊を読んでいたんだ。バタバタと走って返す私に、母は鬼の首を取ったように言う。

「おまえも不自由になったもんだねえ。首にぶら下げておけばいいんだよ」

悪かったわね、と母から新聞をひったくり、テレビ欄を追う。

「残念でした。今夜は野球とサッカーばかりで時代劇は休み。九時から教育テレビで鏡獅子をやるわよ」

母は黙ってベッドへ引き返し、私は夕餉の支度で台所へ立った。

お宅がベストだと聞いたのに

五、六年前、荒川区の妹宅にいたところに、母は片目だけ白内障の手術をしていた。その目も見えなくなったのだから、八十四歳という高齢のきたところだと観念すると思いきや、もう片方の手術をしたいと言い出す。

往診の先生に相談してみたら？　と返す私は、圧迫骨折で入院したときのわずらわしさを思い出し、また入院するのかよとげんなりする。

母の目がよくなるのは幸いだが、秋に入って私の講演の仕事が忙しくなり、病院通いをしていられないこともある。が、「テレビもボーッと影絵のようにしか見えないんだよ」と言われては、この後入ってくる仕事は断るしかないとかレンダーをにらむ。

仕事を選ぶ身分になったというと聞こえはいいが、選ばざるをえない介護者の事情ではない。介護のテーマで講演を依頼してくる側に、こちらのイライラが伝わってしまうことがあるのではないかと、身を振り返る日もあるにはあるが。

さて、月二回の往診日。病人が張りきって自分でシーツを取り替え、パジャマを着替え、ヘルパーさんのこない日なので自分で昼食まで作ってしまう。自分のだけ作ってしっかり食う。目が見えないなんてウソだろ？

ヘルパーさんがシーツを取り替えたばかりでも、医者がくる日は別だ。

娘があきれて言ったことがある。

「おばあちゃんて男の人が好きねえ」

医者だけでなく、自分の息子や孫息子など、オトコとみるとイイ顔をする！　ま、いいけど。